本◆私のおすすめ

河　西　希　美

まず一番に推薦したいのは「創竜伝」田中芳樹著。田中さんの作品の中でも一番元気が良く、中国古典・ＳＦ・鋭い日本社会批判など、小説のいろんな種が仕込まれていて、読書嫌いの人にも抵抗なく読めると思う。ただ、読んでいると危険思想が芽生えるのが欠点(!?)。

元気印の「創竜伝」にたいして、渋い世界好みの方には「剣客商売」池波正太郎著と「競馬」Ｄ・フランシス。「剣客」が、なじみの小料理やで吟味のきいた酒を一杯という世界であるのにたいして、「競馬」は書斎でウィスキー・グラス片手という雰囲気で、どちらもわたくしは好きだけど、ビール党の人はどうなのかしら。ビール党にはシドニー・シェルダンをすすめましょう。日本語訳である作品のいくつかはビデオ化しているから、ビデオを見てから読むと数倍楽しめるかも。

上にあげたのは、一応ジャンルとしてはサスペンスということになるんだけれど、私はこれでも経営学の勉強中。そこで現代サスペンスとして清水一行シリーズをおすすめ。現代企業が抱えている矛盾や問題がもりこまれていてけっこう考えさせられる。また、そういった企業小説の入門編として「大合併」高杉良著がいいと思う。実名入りの企業小説だから一石二鳥という意味もあるし。とにかく面白いんだから。　（経営学部2年）

（8ページ編集後記参照）

「ゴースト・ドラム」
北の魔法の物語

スーザン・プライス作　金原瑞人訳
（1991. 福武書店）

嶋　田　崇　子

本は普段、眠っている。眠りながら自分の夢を見ている。

わたしの手にしたその本は、わたしより少し小さい手にピッタリくらいの重さだった。
それはとても懐かしい重さ。けれど、なにげなくめっくったページに、わたしはそのまま引きこまれてしまった。

ここから、はるかかなたの湖のそばに立っている一本のカシの木。カシの木に巻きついている一本の金の鎖。その鎖につながれている博学多識の一匹の猫。猫はカシの木のまわりをぐるぐるまわる。歩きながら、その猫のかたる物語の一つが、この物語。

透き通ったリンゴの冷たさ。鏡を割る女。丸天井の暗い小部屋。にわとりの脚を持つ家。三百年生きる魔法使い。鉄の森。人の心を閉じ込めた赤い石。闇の中で輝く空の星。白く輝く雪のいてつき。

著者が、自分の魂のうちで最も慈しんでいる部分を作品にしたことがよく分かる。磨かれた雲母をはめこんだ窓に、好みの色だけで絵を描いたかのような印象を受ける。そしてわたしは、その窓の続く長い廊下を、金色をおびた薄暗がりやエメラルドの薄暗がり、そして真紅や群青の薄暗がりへと導かれて行く。

その魂の一部でも、この本を読むことで共有できたことをうれしく思う。もしもわたしがファンタジーを自分の幼年時代と一緒に思い出のアルバムに閉じ込めていたら、一冊の本と共有するすばらしい時間は、きっと今より失われていただろう。この本とも巡り会えなかったかもしれない。

至る所で本は眠っている。けれど、人がページをめくり、その世界に心を遊ばせる時、本と人とは一緒に夢を見るのだ。

（外国語学部ロシア語学科4年）